

[ブーケ]

bouquet



特別企画 / Interview

宮沢和史

Kazufumi
Miyazawa

沖縄と歩んだ 30 年、 今子どもたちに伝えること

THE BOOM として音楽活動をはじめ、《島唄》のヒットを経て
沖縄を知り、伝え続けてきた宮沢和史さん。

現在は時折、生まれ育った山梨県甲府市の小学校で、
《島唄》の背景や沖縄の戦争について語り継いでいます。
高校時代の同級生で、現中央市立玉穂中学校校長の薬袋貴先生を
インタビュアーにお迎えして、これまでの活動を振り返りながら
音楽を通して伝えることへの思いを語っていただきました。

架け橋になった《島唄》

薬袋：今日の講演会では《島唄》にのせた沖縄への思いを感じられたことにすごく大きな意味がありました。あらためて《島唄》をつくるに至った経緯を、沖縄に対する思いも含めて聞かせてください。

宮沢：もともと沖縄の民謡にとっても興味がありました。沖縄音楽は、リズム、メロディー、歌詞、発声と音楽を構成する全ての要素が興味深かった。僕らってやっぱり、ビートルズをはじめ西洋のバンドに憧れるんだけど、いざプロになると、彼らの真似をされていていいんだろうかという自問自答があって。せっかく発信できる立場になったのだから、彼らがつくれないものをつくるべきだし、自分は甲府っていうこの土壌で生まれた植物みたいなものだから、この土壌から果実をつくるべきじゃないかと考えました。甲府は空襲があって、なるべく早く復興しようと近代化してしまったから、リセットされた町というか、古いものが少ない。だから自分のルーツを掘り起こす作業になかなか難航していたんです。そんなときに、ちょっと待ってよ、自分は沖縄に興味があると。沖縄は戦争で悲惨な体験をしているにもかかわらず、どうしてあんなにも芸能が豊かでいい歌がいっぱいあるんだろう。そう思って実際沖縄を回ったら、想像以上に戦争の爪痕があちこちにあって、動揺しました。この沖縄の悲しみを知らないで、よくバンドをやりたいとか言ってもんだなっていう自分への怒りと、どうしてもっと教えないの、こんな大事なことってという教育的な面への怒りが湧いてきたんです。だから自分と同じようにこの悲しみを知らない人たちに、歌で伝えたかったけど、バブルの時代だったから戦争のことを歌ってもきっと誰も聴いてくれないだろうと思ったんですよ。

薬袋：そうですね。日本中がもう浮かれていたというか。

宮沢：ですよね。だから“戦争”を掛けたダブルミーニングにしました。ちょっと遠回りだけど、形にせずずっと歌っていけば、ポディーブローみたいに効いていくんじゃないか。そう思って、アレンジ面でもメッセージを込めました。Bメロは琉球音階ではなく西洋音階になっています。なぜそうしたかっていうと、当時ガマ（洞窟）で自決せよと促したのは大和魂をもつ日本軍であって、沖縄の人じゃないわけですよね。だからBメロは大和（日本本土）で使われる音階にして、三線もやめて、“ウージの森でかくれんぼしてた恋人同士で幼馴染の僕ら、なんでガマで自決しなきゃいい

ないの？”という意味を歌詞に込めました。そしてサビでまた琉球音階に戻って、三線が出てくるっていうトリックです。「大和の人間が三線を持たないで」と沖縄の方々が最初は抵抗があったようなので、平和を祈る歌であって、鎮魂の歌だやっていうことを理解してもらえるように歌い続けました。

薬袋：最初は苦労しましたね。発表して、だんだん広がってはいるけれども、うまくいかないと感じてしまったことがあったんですね。

宮沢：沖縄と大和の間で音楽が行き来するっていうことは、やっぱりタブーだったんですね。水面下ではあったものの、表立ったトンネルがなかったところに僕が入っていったから、沖縄の人もびっくりしたし、沖縄を好きな知識人からの嫉妬も飛んできた。思いもよらずヒットしてしまったときに、9割の人が「ありがとう。よくうちなーんちゅの曲つくってくれたよ。うれしいさあ」と言ってくれたんですけど、残りの1割からものすごく槍が来るわけです。だから一時、沖縄に足を踏み入れるのが辛い時期が正直あったぐらいだけど、でもとにかく歌い続けて、20年ぐらい経ったときにはそういう声もう聞かなくなってきました。

薬袋：やっぱり続ける中で理解してくれる人が多くなってきたってことですね。

宮沢：「あんたは沖縄でお金儲けてどっかに行く人だと思ってたけど、まだ沖縄にいるね」って言われたんですけど、それはなんていうか、「ありがとう、ずっと沖縄を見ていてくれたんだね」っていう意味なんだろうなと。

後世に繋ぐ“両輪”

薬袋：《島唄》をつくってから、今も継続して沖縄で活動されていますけど、特に力を入れているプロジェクトはありますか？

宮沢：そうですね、「くるちの杜100年プロジェクト in 読谷」というものがあります。くるちは琉球黒檀のことで、三線の竿の部分に使われている木。長寿で、力強く折れないし、割れないし、三線はくるちじゃなきゃダメだっていう信仰があるくらいなんですけど、それが戦争で焼けてしまったり、採り尽くしてしまったりして、現在はほとんど輸入です。地元の職人からは、「島唄がヒットした後からだ」とからかわれて、もしかして、とんでもないことしたのかな、とはっとし

ました。それなら自分で植えようと動いていたところ、よみたんそん読谷村で同じような事業があったものの3年で終わってしまって、放置されている土地があるから引き継がないかと自治体から声を掛けられました。草ぼうぼうの状態にちょっと愕然としたけど、草を刈ってみたらくちが生き生きとしていて、俺たち素人だけど、これはできそうだと、木の生命力に可能性を委ねました。今ではくちが3000本ぐらいあって毎月草刈りをしていて、沖縄県からはもとより、他県からも毎月ボランティアの人が集まってくれます。あと、三線を作ることの他にみんなが夢に描いていることがあって。三線の木材として使えるのに100年から200年かかるんですけど、もし200年後に三線になっていたら、その間は沖縄に戦争がなかったってことになる。それを裏テーマにして、未来の島の子どもたちが育てているイメージをすることで、やりがいに繋がっています。

薬袋：子ども、孫の世代に託すために、子どもたちにはどうやって伝えているのでしょうか？

宮沢：今できることは、スタッフも含めみんなで小・中学校を回って、こういうことをやっているから孫に伝えてね、と話すことです。

薬袋：くるちの木をはじめ、沖縄の子どもたちは沖縄の伝統に対してどのような意識をもっていますか？

宮沢：僕が足を運んだ30年くらい前、継承は難しそうな感じがしました。民謡はおじい、おばあがやるもんだ。僕たちはバンドがやりたいってね。僕らの世代で、伝統芸能をやってる人って極端に少ないんです。僕はそれで責任を感じて繋げようとしていたけど、今はもう違う。いろんな学びの場があるのでやりたい子が増えています。沖縄芸術大学や国立劇場、沖縄県立美術館、博物館が上手く連携をしていて、若い子を育てて、発表の場をつくって、学術面でもサポートするってい



植樹されたくちの杜

うすごくいい流れがあるんですよ。

薬袋：教育の力はやっぱり大きいですよ。僕らが教わったときの音楽の授業って、多くが西洋音楽でした。けど今は、国や地域の伝統音楽を学ぶ機会が授業の中で増えてきていて、日本の音楽の大切さや、他の音楽との比較でさまざまな文化を知ることがやっぱり我々には必要なんですよ。

宮沢：沖縄を見て素晴らしいと思うのは、常に両輪なんですよ。琉球古典音楽には、琉球国が公式に認めている伝統音楽と、庶民により広く歌われる民謡があります。例えば組踊くみおどり（沖縄の読み方：くみをうどうい）は、昔、踊奉行おどり ぶ ぎょう（沖縄の読み方：をうどういぶじょー）と呼ばれる人が江戸に上って、歌舞伎やお能を見て琉球流にアレンジしてできたものだけど、そのカウンターで現代版組踊ができた。今風のダンスにセリフも標準語。中学から高校までの子どもたちが演じるから、大人も協力するようになり、街全体が活気付いていく。だから、沖縄の芸って死なない。どちらもいまだに公演は続けられています。

薬袋：古きを新しくしていくことも、沖縄に根付いた文化になってきているんですね。

宮沢：そこにはね、喧喧諤諤もあるから両輪が回ってるんですよ。世界エイサー大会の審査員に入ったことがあるんですけど、審査するのが難しいんですよ。現在皆さんがよく見るエイサーは創作エイサーといって、エンターテインメントなんです。一方で伝統エイサーっていうのは昔ながらのスタイルで、家や店の前を回ってシンプルに行われるもの。だからそういう伝統を守ろうとする人の意見もある。それで思ったのは、沖縄の先祖、ウヤファーフジが見たときに、「カッコいいな、俺の時代にこんなのがなかったな」って思えるのであれば、どんなスタイルでもいいんじゃないかと。これは違うよって先祖が思うようなものはやっぱり違う。そこはみんな想像できるんですよ、沖縄の人は。

ルーツがあるから踏み出せる、“ホンモノ”の世界

薬袋：こういったお話を、山梨の学校で講演してくれていますが、子どもたちに「伝える」ためのコツなどはありますか？

宮沢：皆まで言わないということですかね。結論めいたことは言わない。子どもがどう気付くかとか、どう



解釈するかっていうのに委ねる。そうすると、人は行動を起こすので、入口まで案内するということを心がけるようにしています。

薬袋：やっぱりご自身で足を運んで現地を見られたからこそのお考えという感じがします。

宮沢：もともとそんなに外の世界を知りたいっていう社交的なタイプじゃなかったんですね、若い頃はどちらかというと自分の内面を歌にしたかった。でも沖縄をきっかけに、行ってみないと分からないことがあると思いました。東京はいくらでも音楽が聴ける環境だったけど、「どうして沖縄ではこういう音楽になったの？」ってことは、やっぱり現地の人と付き合ってみないと分からないんですよ。ブラジルの音楽も大好きすぎて、行ってみなきゃ分からないと最初1週間滞在したんですけど、もう毎日刺激的すぎました。楽器とCDを買って、ライブ見て、曲ができたから録音してという日々。《風になりたい》も初めてブラジルでつくった曲です。だから今でもそうなんですけど、自分が触れた物だけを信じようって思っています。

薬袋：THE BOOM時代からいくつも曲を聴いていますが、地元のもの、例えば「朝日通り」なんかが歌詞に

出てくるんですよ。地元をすごく大事にして、山梨のことを思い馳せてくれている瞬間があります。自分が生まれ育った地域に対してどのように思っていて、そして音楽にどう反映していたのでしょうか。

宮沢：振り返ってみると、自分がつくる音楽ってバラバラなんですよ。フォーク、ファンク、ロック、ジャズ系のものもあるし、サンバ、タンゴ、ファドもある。でもそこには、山梨の甲府っていう内陸の、あんまり外と交流がないところで生まれたっていう自覚と、この土から生まれてきたんだぞっていう誇りみたいなものがあります。この山梨で生まれた人間、ほうとうをつくるみたいにカツオで出汁が取れれば、ブラジルの食材でもどんな食材でも絶対自分から遠くはならない、俺の音楽になるっていう確信がある。そういう物差しがあるから、どこまで飛躍していても大丈夫だと思うんですよ。

薬袋：ふるさとから離れて、いろんなところに行ってみたうえで、子どもたちにとってふるさとを大切にすることは大事なことであらためて感じますか？

宮沢：旅をしていると、ふるさとっていうものはとても複雑だなと思います。僕はこうやって豊かなふる



さがあるから恵まれているけど、帰りたくても帰れない人も、ふるさとなんか嫌だっという人もいる。ふるさとって美しいだけのものじゃない。東日本大震災も、あんなに美しいところがって僕らの価値観をひっくり返しました。東北自動車道が開通したときに、いても立ってもいられなくて、ギターを積んでいわき市に行ったんですよ。美空ひばりの《みだれ髪》の歌碑があって、一度見たかったんですけど、そこはひどく被災したと聞いたので。そしたらもうとんでもないことになっていました。道は途中から行けないし、瓦礫の山だし。ここに来ることは僕にとって運命だなと、それから定期的に行くようにしたんです。何年後かに綺麗に整備されても誰も住んでいない。新しい街で生活が始まっていくから、ふるさとには帰らないって人も多いわけです。でも、ふるさとって何があるって最終的に帰ってこいよって言ってくれる気がするじゃないですか。だから、帰れない人や忌み嫌っている人も、やっぱりどこか心にみんなふるさとがあるとと思うんですよね。

「あなたの夢はなんですか？」

薬袋：学校での講演会で、子どもたちに「夢は何？」と聞き出して、その夢に対してメッセージを出してく

れました。そこがね、やっぱり魅力的ですよね。夢をもちにくい時代の中で、俺もこうなりたいということが難しくなっている。だけど、子どもたちって本当は夢を話したいから、それを引き出してもらえらってすごく大事なんです。もっと触れ合ってもらいたいし、夢をもつことの大切さを伝えてほしい。

宮沢：「こうふドリームキャンパス」っていうプロジェクトを甲府市で行っています。子どもたちから事前にアンケートで、「あなたの夢は何ですか？その夢のために今何をすべきですか？」って聞いて、全部読んで、この子を取り上げたら面白いだろうとか、響くだろうとか考えながら選んで。いろいろ聞きたいですよ。こちらも気づきが大きいんですよ。子どもってすごいこと言いますからね。

薬袋：印象的な子どもはいましたか？

宮沢：歌手になりたいっていう女の子がいて、今歌える？って言ったら、ええってなりつつも、じゃあやってみますって歌ったら上手いんですよ。見事に大きい声で歌って、もうみんな見る目がガラッと変わって、その子も自信がついたようです。ああすごいな、よく歌ったなって、きっと歌手になるって思いましたね。

いつかどっかで会おうねって言いました。

薬袋：そうしたきっかけが子どもの人生を大きく変える。宮沢さんみたいなゲストティーチャーに来てもらうってかけがえのない時間で、子どもたちにとっても忘れられない体験です。今後の展望はどのように描かれていますか？

宮沢：具体的には、「うちの町に来て歌ってほしい」という声を募集して回っているんですけど、やりがいがあるんですよ。今まで行かなかったようなところに多く行ってます。連絡をくれた人も、場合によってはスタッフとして入ってもらうこともあります。

ライフワークになるなと思っていて、続けていきたいですね。あとは今年ブラジルと日本が友情を結んだ、日伯修好通商航海条約を締結してから130年の節目なので、ブラジル大使館、領事館に協力してもらって、11月の終わりから12月の頭にかけてブラジル音楽週間をつくりました。僕がオーガナイズして、自分がやってる多国籍バンドやブラジル人のミュージシャンを招いたライブで、ブラジルを満喫する一週間っていうのを計画しています。

薬袋：さらに音楽を通して、人を豊かにしていただけるような立場で今後も走り続けていただけるように、一ファンとして応援しています。

宮沢和史（みやざわ・かずふみ） シンガーソングライター



1966年山梨県甲府市生まれ。1989年にデビューしたバンド「THE BOOM」でヴォーカルを務める。代表曲の《島唄》は国内にとどまらず、アルゼンチン歌手によってカバーされ、アルゼンチンの音楽賞3部門を受賞した。2014年のバンド解散後は、ソロ歌手としての活動のみならず、多国籍バンド「GANGA ZUMBA」などでも活躍している。ブラジル音楽のサンバやボサノヴァをはじめ、世界のポピュラー音楽を取り入れた楽曲を発信している。沖縄県立芸術大学非常勤講師。
宮沢和史オフィシャルウェブサイト <https://miyazawa-kazufumi.jp>



薬袋 貴（みない・たかし） 山梨県中央市立玉穂中学校校長

山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部音楽科卒業。トロンボーンを井上順平氏（元東京都交響楽団）、指揮法を故上杉隆治氏（元桐朋学園大学講師）に師事。兵庫教育大学大学院で音楽科教育を鈴木寛氏に師事。山梨県教育庁義務教育課指導主事や山梨県内の中学校教諭を経て、現在は中央市立玉穂中学校校長。山梨交響楽団、やまなしジュニアオーケストラ等の団内指揮も務める。

CD

～35～
2024年4月24日 発売。
音楽生活35年を迎え、様々な音楽仲間を迎えて制作したアルバム。

LIVE

あなたの町で歌います♪プロジェクト
「我が町で歌って欲しい」という声に応えて、日本全国津々浦々、“歌いに行くコンサート”。
おすすめの会場、都市などを募集中。
詳しくはHPへ。

Semana da Musica Brasileira（宮沢和史オーガナイズ ブラジル音楽週間）
●Newest GANGA ZUMBA 2025～最新のガンガ ズンバ コンサート2025～
2025年11月25日（火）ビルボードライブ東京／11月26日（水）ビルボードライブ横浜

●ヴァネッサ・モレノ＆サロマウン・スアレス×マルセロ木村 ●Canta Brasil! ～宮沢和史ブラジルを歌う！～
2025年11月27日（木）ビルボードライブ横浜 2025年12月2日（火）ビルボードライブ東京

Information

A Finder's Memory

川しま ゆうこ

フォトグラファー。千葉県生まれ。大学在学中に写真を撮り始める。
第17回写真『ひとつぼ展』入選。撮影スタジオ勤務、ロケアシスタントを経て、
2005年からフォトグラファーとして活動。雑誌・書籍・広告・Webなどの媒体で、
人・暮らし・料理・旅・風景・アイテムの撮影を手がける。

(HP) <https://kawashimayuko.com> (Instagram) [kawashimayuko_peeco](https://www.instagram.com/kawashimayuko_peeco)

夏のフランス、パリから郊外へ出かける日の朝、少し早く出て街を歩いていたら、古い石造りの教会を見つけた。ひっそりとした佇まいの入口をくぐると、ほの暗くひんやりとした静寂に包まれる。

目が慣れてくると、重厚な柱とアーチは素朴ながらも荘厳な雰囲気醸し出し、高くそびえる壁にはステンドグラスがはめ込まれ、石の床に色とりどりの光が降りそそぐ。

歴史が刻み込まれた柱や床、並んだ椅子から、人々の祈りや日々の暮らしの気配がする。誰もいない空間で、フィルムカメラのシャッター音と足音だけが響いていた。

幼い頃から石が好きで、気に入った質感の石を今でも集めている。この写真を見るたびに、心やすらぐ沈黙が思い出される。



教育百景

おしえ・をばいする日々

学校とは異なる環境で、教育活動に取り組まれる先生をご紹介します本連載。

今回は小学校校長を退職後、ご住職として務める傍らジャズを奏でる、久遠峯志先生にお話を伺いました。

元長野県飯綱町立三水第一小学校校長
阿弥陀寺住職



第6回

ひざとおみねし
久遠峯志先生

自分なりの表現をジャズで

——ジャズとの出会いについて教えてください。

高校生の頃、学校の文化祭で友達がジャズサックスを吹いていたのを見て、カッコいいな！と衝撃を受けたのがきっかけです。全国的に学園紛争が盛んな頃でもあったので、「ジャズっていうのは黒人の魂の叫びなんだ」なんていう話をその友達から聞いて、納得してしまいました。私、小学校の高学年から^{きつおん}吃音だったんです。人前で喋るのが苦手で、本を音読するのもつかかかったりして、思春期は劣等感の塊でした。だからその黒人の叫びと自分に何か共通点があるように思えて、彼らのジャズによる自己表現に惹かれて、サックスを始めました。

——当時はどんな曲を聴かれていましたか？

子どもの頃から音楽が好きだったので、ジャズに限らず、父親が買ってきたポピュラー曲のレコードをそれはもう大きな音で聴いていました。ジャズを聴き始めた高校生の夏休みには、牛乳配達のアパートをして、レコードを月1枚ずつ買っていましたね。

——大学生になってからはどういった活動をされていたのでしょうか。

まずジャズのサークルに入りました。大学に入学したときは、学園紛争で校舎がバリケード封鎖

されていて授業がなかったから、昼間は楽器の練習をして、大学2年生になってからはナイトクラブでバンド演奏のアパートをしていました。

——人前に出るのが苦手だったのに、ナイトクラブで演奏されるほどに良い変化があったんですね。

大学に行ったらすっかり環境が変わって、友達の影響でうんと明るい性格になったんです。吃音も気にしなくなって自然に治りました。人前に出て演奏するのも、自ら楽器で表現できるというのが気持ちよかったんでしょうね。

——ご自身なりの、こういう表現がしたいというモットーはありましたか？

カッコよく演奏できるようになるには、“ジャズの言葉”というか、言葉と同じように表現の仕方を勉強しなくちゃいけないと先輩やクラブの親方から言われました。だからレコードを聴いてコピーしながら、譜面に自分なりの表現を書き込んでいました。クラブのビッグバンドで演奏していたとき、アドリブのある譜面があって、やっぱり楽しかったですね。

——アドリブ演奏は楽しさが一味違うのでしょうか？

プロってほど^{おおげさ}大袈裟なものじゃないですけど、

好きなことをやってお金をもらえれば、こんなにいいことないなって（笑）。でも、大学4年になって卒論に勤しんでいたとき、たまたま健康診断を受けたらレントゲン検査で影があると。肺結核だったんです。泣く泣く休学して、故郷の長野で入院しました。お医者さんにも、吹くことを仕事にしない方がいいねと言われて。布団をかぶって落ち込んでいた頃、小児病棟の子どもたちと一緒に遊んだり勉強を教えたりしていたのですが、それがとても楽しかったんです。それで療養を終えてから、中・高の国語と小学校の免許を取りました。母校の小学校へ教育実習に行ったとき、ちょうど初日が音楽会の日だったのですが、子どもの純粋な歌声を聴いたら綺麗だくなって、涙が出てきて、小学校の先生になる決心をしました。

子どもも大人も引き込む「音楽」

——より音楽の授業には力が入ったのでしょうか！音楽を教えるにあたって、大事にされていたことはありますか？

自分も子どもの頃は自然の多いところで育って、授業で山に行ったのが楽しかったから、できるだけ自然の中で授業をしたいというのはありました。ギターを持って田んぼに行って、そこでみんなで歌ったときは喜んでくれましたね。あと覚えているのは、長野県の研究協議会で音楽の授業を担当したことがあったのですが、グループでアンサンブルをして、みんなで聴き合って、意見を言い合うという流れでいつも通りに進めたんですね。他の教科では苦勞している先生が多かったのですが、子どもたちが喜んで取り組んでくれたから苦勞することなく授業ができて、日々の積み重

ねが大事だなと実感しました。

——バンド活動のご経験が、学校教育に生かされた場面はありますか？

子どもたちに披露して喜んでもらえる機会が多くありました。異動したばかりの学校でも、全校児童に向けてサックスを吹いたら、みんな楽しそうに聴いてくれて距離が縮まりましたし、教頭・校長のときは卒業生を送る会などで演奏したこともありましたね。中学に行ったら吹奏楽部に入ろうって思ってくれる子もいました。あとは母校に赴任したとき、ちょうど体育に力を入れていたんですね。隣のクラスの先生が、エアロビクスのように音楽に合わせて体を動かして準備体操をしていたのがいいなと思って、私も実践しました。体育館で音楽を流すと、何も言わずとも子どもたちはすぐ準備体操を始めるんです。それから持久走で学校の周りを走るときなんか、ふさわしい音楽を自分で考えて流していました。そういう演出は好きでやっていましたね。

——子どもたちも、普段から意識して音楽を聴くようになるでしょうね。校長先生をされていたころ、学校経営の中で音楽的な側面を意識されていたことはありますか？

学校と地域の結び付きに力を入れていたこともあり、保護者と子どもと一緒に合奏をやったのは楽しかったですね。指導主事の頃、社会教育として生涯学習に携わっていたことがあるので、そのとき知り合った方々の中から楽器の講師を呼んで、月2回ぐらい練習して地域の発表会で演奏しました。全くの初心者であっても、お母さんたちは喜んで取り組んでくれましたね。

自由に音楽を描く

——教員時代も引き続き、音楽との触れ合いを大事に過ごされていたのですね。現在どのような活動をされているのですか？

長野市で活動している「Hot Blizzard Jazz ^{ホット}^{ブリザード}^{ジャズ} Orchestra」で、もう43年演奏を続けています。また社会教育に携わっていた頃、高齢者向けのカルチャー教室を始めて、今もサックスや軽音楽の講師を務めています。高齢者は新しいことを始めると脳が活性化するので、楽器なんて本当に効果



▲本堂でジャズライブ



▲法衣に身を包み、サックスを構える久遠先生

的ですね。あとは中学校の部活動が地域移行されたので、新設されたばかりの軽音楽部の指導がちょうど最近始まりました。ギターを希望する子が多いですね。あいみょんとか、ポカロとかやりたいって。初音ミクの「千本桜」は、私もサックスで吹いたことがあります。今後はぜひ一緒に演奏してみたいです。

—— かわいいですね！本当に長い期間サックスを吹かれていて、そこまでのめり込んだ理由はなんでしょう。

周りの人々が私の演奏を聴いてくれて、そしてご自身でも演奏をして楽しんでいる姿を見ると、やりがいを感じるんだと思います。以前PTAコースをやっていたとき、公民館で地道に活動しつつも発表の機会がない人たちに声をかけて、コンサートを立ち上げました。“はずかしうれしコンサート”。発表するのは恥ずかしいけど、ステージに立ったらこんなにもうれしい！という思いをかたちにしました。それが今でも続いていて、年齢問わず子どもから大人まで参加しています。ジャンルや楽器は問いません。最初は12団体ぐらいだったのが、だんだんと口コミが広がって、多いときは30団体ほど集まったこともありました。続けてきてよかったなって思いますね。

—— そういった活動は、今のご住職としての仕事にも生かされていそうですね。

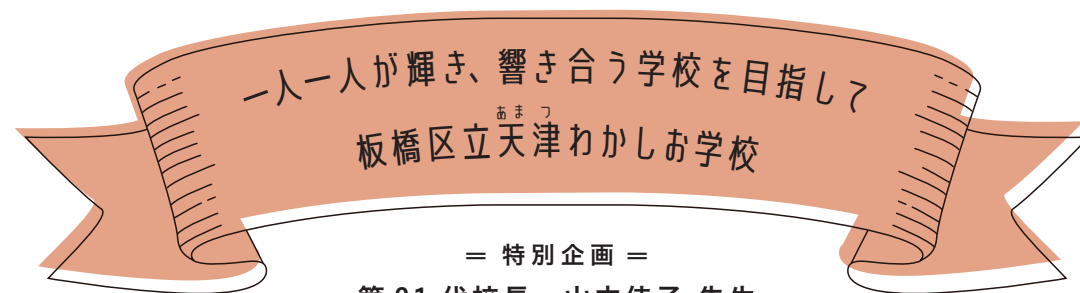
住職としては、法話にサックス演奏を挟むと喜んでもらえるので、必ず演奏しています。ちょっと話して、途中で何曲か間に入れて。顔ぶれを見て受けそうな曲を演奏するので、評判がいいんです。楽譜はアニメの曲から高齢者向けの曲まであります。アニメ曲は子どもたちの集まりで喜ばれます。長野養護学校の音楽教室などに毎年呼ばれていて。

—— レパートリーが増えていきそうですね。これからの子どもたちには、どのように音楽に関わってほしいですか？

よく思うのは、美術の授業は真っ白な紙に自由に描かせますよね？そういうのって音楽でもあってほしいと思うんです。音楽は子どもにピッタリくるような曲がもうできている。もちろんそれもいいのですが、自由に音楽をつくってみてもらいたかったなというのは思います。ジャズも元々は、自分なりに即興で演奏するものです。ジョン・コルトレーンっていう人、ご存知ですか？ビバップをやって、さらにアルバム『ジャイアント・ステップス』で細かな表現をして。そこからさらに前衛的な表現になって、音からなから自由に表現してね。「ああ、これがジャズかぁ」と。今までのジャズの流れ、既成のものを打ち破って、常に乗り越えてきて、そのときは異端児扱いされるけど、それがまた主流になる。自分なりの表現や聴き方っていうのはみんなもっていますよね。だから本当に自由な世界で、自分なりの表現をすることが大事だと思います。音楽の教科書では6年生になると、コードの流れに沿って旋律をつくってみましょうという教材がありますよね。音楽に触れるには、そういう自由さが大事だと思います。



▲最後の校長講話の際、子どもたちの前でジャズを演奏



＝ 特別企画 ＝
第21代校長 山中佳子 先生



今号の特別企画では、熱い思いをもち、学校経営に取り組む先生をご紹介します。
板橋区立天津わかしお学校は、健康回復・改善及び健康増進を目指した、全寮制の特別支援学校です。
豊かな自然が広がる天津の地（千葉県鴨川市）に寄宿舎一体型の校舎を構えるこの学校では、
小学校3～6年生の児童が自身の健康課題と向き合い、協働しながら生活をしています。
学校での取り組みや教育に対する思いについて、校長の山中佳子先生にお話を伺いました。



やまなかよし
山中佳子 先生

板橋区立天津わかしお学校 第21代校長
東京都板橋区教育会音楽部顧問
全日本音楽教育研究会小学校部会庶務部長

心身の健康を育むために

—— こちらの学校には、どのような子どもたちが通っているのでしょうか？

山中：ぜん息や肥満、偏食、虚弱といった健康課題を抱えた板橋区の小学校3年生以上の子どもが通っています。最近では、以前通っていた学校で居場所がつかれず不登校になり、そこから昼夜逆転や過食・偏食に陥り、結果的に体調を崩してしまう子どもの入学が増えています。そのため、身体的な回復に加え、元の学校でできなかったことを取り戻して、自信を付けて帰れるようにすることがこの学校の役割になります。
—— 10代に満たない子も親元を離れて寮生活を送っているのは驚きました。

山中：ここでは24時間規則正しい生活を基盤として心身を整えていくために全寮制なのです。自身の健康課題と向き合いながら、性格や考え方の異なる仲間と助け合って生活することは簡単ではありませんが、だからこそ点数では測れない「生きる力」が育つのだと思います。

—— 主にどのような授業や活動をされていますか？

山中：健康課題が改善されたら元の学校に戻りますので、教



サーフィン教室の様子（左は山中先生）。地元のサーファーによる指導で未経験の子どもでも波に乗れるようになるという



学習発表会で、「Paradise Has No Border」（NARGO 作曲）を合奏する6年生の児童。このときは、担任の先生もトランペットで参加した

科書や学習内容は区内の学校と同じです。そこに特別支援学校として、健康改善のための授業や自立活動がプラスされています。自立活動では、毎日の適度な運動や、ゲーム感覚で楽しめる社会生活スキルトレーニングも組み込まれており、自己管理能力を高めながら、他者との関わり方を自然と学べるような素地をつくっています。また少人数学級の強みを生かし、個別指導を充実させ、一人一人の学習状況に応じた支援を行う他、寮生活をはじめ、異学年で協働して企画・運営する場面も多く設けています。

——山中先生が赴任されてからは、音楽にも力を入れていると伺いました。

山中：そうですね、音楽は心の健康に直結しています。この学校では、さまざまな要因から自分を表現することが難しかったり、他者意識が苦手だったりする子が多くいます。そのため、まずは歌って自分を出すことから始めます。次に、合唱や合奏を通して、他者を意識し合わせることを学んでいきます。そうして、みんなで完成させる達成感を味わえたら、自信にもつながります。また、トーンチャイムを使って音の送り合いをするなど、音楽療法的な効果をねらった常時活動を取り入れています。人との対話が苦手な子も、音で会話することによって少しずつ心を開いてくれて、その後の歌唱でも声が出るのです。何より、親元を離れた生活の中で、音楽は子どもにとって心の癒やしになっています。子どもの好きな曲を起床などの生活の合図音にしたり、誕生会では、私も先生方と一緒に音楽の出し物をしたりして、みんなで日々楽しんでいます。音楽には、そういった人を和ませる力がありますね。

「か・つ・や・く」する子どもたちを信じて

——学校で印象的だったエピソードを教えてください。

山中：Ⅰ学期に寮対抗の駅伝大会をしました。チームに肥満の子がいるとタイムが落ちてしまうのですが、得意な子がフォローするなど子どもが自ら考え、全員が安心して走れるような気遣いを見せてくれました。勝負にこだわる子も多いのですが、そのときはみんな完走できたことに拍手が起こり、その温かい雰囲気感動しました。「か・つ・や・く（考える・強くなる・優しくなる・掛け合い）」という学校の合言葉があるのですが、日頃から伝えているこの言葉を子どもたちが

体現してくれてうれしかったですね。

——卒業後も大切にしてもらいたい言葉ですね。

山中：ここでの経験を自信にして、子どもたちが自己実現していけるようになることが、この学校でのゴールです。自己調整、自己選択、自己決定、そして多様性への理解。自分とは異なるさまざまな考え方や価値観を受け入れながら、自分をどう表現していくか。それが自己実現へとつながります。この学校では、勉強面でも生活面でも常に目標や見通しをもつことを大切にしています。

——子どもたちの主体性が重要なですね。具体的にはどのような取り組みをされていますか？

山中：「がんばりカード」といって、どんな自分になりたいかを考え、そのために何をどのようにがんばるかを自ら設定して書くことをしています。大事なのは、思っていることや進捗状況を必ず可視化して残すことです。例えば偏食を直したい子は、まずメニュー表にある食べられないものを全てチェックし、それを6大栄養群に分類してグラフ化します。すると、タンパク質が足りず筋肉が付きにくい状態だけど、食べられるようになったら、運動も得意になるし丈夫な体になるということなどが分かります。そのために、「Ⅰ学期に魚を5口は食べられるようになる」と、具体的に目標を設定します。進捗状況も自分で確認し調整していきます。また、先生や家族からの応援メッセージをもらい、それを励みとして進めています。

——自分で可視化することがやる気につながるのでしょうか？

山中：実感が伴わないと、何のためにやるのかが分からないし、やらされているになっては効果がありません。親元を離れての寮生活ですから、友達といってもやはり寂しいですよ。それでもがんばり続けるためには、自分ごととしてきちんと理解し、自らの思いや意図を明確にしていく必要があります。

——子ども自身での調整が難しい場合、先生はどのような指導をされるのですか？

山中：無理強いはず、何が不安なのか話を聞いて、どうしたいかを一緒に考えながら、本人に選ばせるようにしています。その子のもっている力を信じながら大人が先回りして手をかけすぎず、かと言って任せすぎず。その子のがんばりを認めて価値付けてあげることが大事です。



城崎海岸を望む寄宿舎からの景色。海や山里の豊かな自然を生かした体験学習も盛んに行われている

音の出ないシンフォニーへの挑戦

——先生方にはどのようなことを期待されますか？

山中：子どもたちと同じように、先生方も自分を輝かせられる持ち味で勝負してもらいたいと思います。立場は先生ですが一人の人間として、すてきな大人のモデルとなってほしいです。先生だからなんでもできて当たり前ではなく、傍らにスポーツや音楽など、自分の心を癒してくれるものをもって、何事にも一生懸命にがんばる姿を子どもたちに示してくれるとうれしいですね。

——先生方も輝ける、「か・つ・や・く」ということですね。

山中：まさに、私が学校経営方針で目指している児童像は教師像でもあります。「目標をもち、“なりたい自分”をめざして“か・つ・や・く”する子・教師」です。先生方も一期一会ですから、この学校でしかできないことを大事にしながら、理想の教師像をイメージし、とことん自分の強みを生かしてもらいたいと思います。ここでの経験は、これから先の教師人生に必ずプラスになるはずです。

——山中先生は音楽の教員をされていたと伺いました。教員時代の経験で今に生きていることはありますか？

山中：合唱や合奏は、一人一人の個性や感性を生かしつつ、みんなで一つの曲にまとめますよね。教師に子どもたちを惹きつける魅力がなければ、まとまりません。一人一人に寄り添いながら、熱意をもち音楽と向き合う姿勢でいるとみんな指揮を見てくれるのです。それと学校経営は全く同じだと思っています。私の“めざす学校像”は「心地よいリズム、一人ひとりのメロディ、人と人とのハーモニー ～みんなで奏でる天津わかしお学校～」です。私が子どもたちと一緒に音楽をつくってきたことの哲学がそこにはあります。多様な価値観や持ち味をもつ先生方、地域、保護者の皆様と、一つの目標に向かって、みんなで補い合いながら意見を持ち寄り前に進んでいきます。これを私は「音の出ないシンフォニー」だと思っています。人と人の織り成す音の出ない音楽＝学校をつくることに挑戦すると決めました。容易ではないけれど、今、思い切って校長になってよかったと思います。巡りめぐって、人を育てる＝自分を育てるという教育の原点に帰ってきたと感じています。

——一人一人を大切にされるようになった背景には何かあったのでしょうか。

山中：教員時代、子どもとうまく打ち解けられず、とても苦しいときがありました。もう教師を辞めようと考えていたときに、当時の教頭先生から、辞める覚悟があるなら自分のことを全てさらけ出して子どもに向き合ってみたらと言われ、それで思い切って、子どもたちにありのままの気持ちを伝えました。すると、私の思いを理解してくれて、子どもたちも気持ちを伝えてくれました。先生が一生懸命なのは分かるけど、子どもにもプライドがあるとか、先生は聞いてくれるようで、実は先生のやりたいようにもっていったらどうか（笑）。当時の子たちには申し訳なかったのですが、そこでようやく理解できたのです。子ども一人一人の思いやがんばりをまず尊重するという基本をそのとき学びました。それが大きいですね。

——子どもたちは見ているのですね。

山中：鋭いですよ（笑）。私もさらけ出して、情けない姿をたくさん見せましたしね。だから、思い通りにいかず、弱みを見せまいと余計に固執してしまうこともあるかもしれませんが、うまくやろうと気負う必要はないと、先生方に言ってあげたい。多様な価値観や選択肢がある時代です。自ら考え決断し、目標やなりたい自分に向かっていくことが求められるし、それは将来の夢や幸せにもつながります。叶えられなかったとしても、一生懸命やることに価値があるのです。そこに気付けた人は次へと向かっていけます。青臭いかもしれませんが、子どもたちにも先生方にも、一生懸命になることの大切さを伝え続けたいと思っています。



取材は2025年8月28日、天津わかしお学校で行われた

2025GP環境大賞（一般印刷の部）受賞のお知らせ

教育芸術社は、この度GP（グリーンプリンティング）認定制度において、
「2025GP環境大賞（一般印刷の部）」を受賞いたしました。

現在発行している教科書『小学生の音楽』『中学生の音楽・器楽』の裏表紙には
「GPマーク（環境ラベル）」が表示されています。
このマークは、印刷業界の環境自主基準を満たした認定工場で印刷し、
使用している紙やインキ等も環境基準に適している製品であることを示すものです。

教科書は子どもたちが感性を育むかけがえのない時期に手にするものであり、
「環境にやさしい教科書を使ってもらいたい」という願いのもと、
当社では高い基準を満たす教科書づくりを続けてきました。
関係会社との連携で、出版までの「製紙」「印刷」「加工」「製本」全ての工程において、
環境に配慮した取り組みを行っています。

今後もよりサステナブルな社会の実現に向けて、
豊かな地球環境を目指す取り組みを一層推進してまいります。

GP（グリーンプリンティング）環境大賞とは

一般社団法人日本印刷産業連合会設立30周年を記念して2015年に創設された賞。印刷業界が地球環境への負荷低減に取り組むために創設したGP認定制度に対して、深く理解し積極的に活用している企業や団体に贈られる。今回は、2024年度にGPマークを表示した印刷製品をもっとも多く製造した企業・団体が表彰された。

GPマークの意味



次号『bouquet [ブーケ]』No.25「SDGs特集 Think Globally, Act Locally Vol.7」で本賞の授賞式の模様をお届けします。

- 従来の印刷製品の環境マークが、紙やインキ、または製造工程の一部を対象としたものに対し、GPマークは資材から工程までの総合的環境配慮マークです。
- 印刷製品にGPマークを表示することで、印刷資材、製造工程、印刷会社の取り組み全てが、環境に配慮されていることが一目瞭然になります。
- GPマークを表示するための環境配慮等の条件が公開されており、明確になっています。
- 第三者からなる認定委員会によって認定を受けた工場の印刷製品であり、その内容が保証されています。他（日本印刷産業連合会WEBサイトより抜粋）

上野耕平の CROSSING [クロッシング]

三重県四日市市の近鉄富田^{とみだ}駅から、いなべ市の西藤原駅を結ぶ三岐鉄道の三岐線。全長26・6キロと決して長い距離を走るわけではないが、様々な表情を併せ持つ大変魅力溢れる鉄道だ！

富田駅を出るとしばらくは市街地を走るため、時間帯によっては学生さんの利用も多い。更に進むと、やがて田園や田畑が広がる風光明媚な車窓。川を渡ったりトンネルを潜ったり……。実にワクワクするシチュエーションがひっきりなしにやってくる！ 極め付けは、この三岐線は旅客営業だけでなく、全国的にもかなり珍しくなってしまう私鉄での貨物営業があるのだ！ 時間が合えば東藤原駅構内で貨物の入れ替え作業を眺めることもできる。

魅力溢れる三岐鉄道。三岐線ともうひとつ、唯一無二な車両が走る路線がある。その話はまた今度……。



第22回

短距離に
魅力が詰まる
三岐鉄道！
さんぎ



文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞（史上最年少）。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×(かける)クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「妄想トレイン」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

上野耕平コンサート
情報はこちら▶▶▶

<https://uenokohei.com/concert/>
（上野耕平公式サイトより）



編集部メモ

三岐鉄道三岐線は、旅客列車以外にも、セメントやその関連製品などを運ぶ貨物列車も運行されており、地球環境に優しい鉄道貨物郵送を続ける数少ない私鉄として知られている。

沿線には、貨物鉄道を対象とした日本で唯一の「貨物鉄道博物館」もある。また、電車で自転車を無料で持ち込みできる「サイクルパス」の制度があり、近隣住民や観光客に親しまれている。



Contents

- 04 〔特別企画／Interview〕 宮沢和史～沖縄と歩んだ30年、今子どもたちに伝えること（聞き手：薬袋 貴）
- 10 〔連載〕 フォトエッセイ A Finder's Memory 2枚目 川しま ゆうこ
- 12 〔連載〕 教育百景 おしえ・そだてる日々 第6回 久遠峯志
- 15 〔特別企画〕 一人一人が輝き、響き合う学校を目指して
～板橋区立天津わかしお学校（第21代校長 山中佳子）
- 18 〔Information〕 2025GP環境大賞（一般印刷の部）受賞のお知らせ
- 19 〔連載〕 crossing 第22回 上野耕平

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.24をご清覧いただき、ありがとうございます。
巻頭インタビューは季節の花が咲くカフェで行われ、宮沢和史さんと
薬袋貴先生の同級生同士ならではの心地よい空気感たっぷりの取材となりました。
久遠峯志先生は地域の方々に愛される住職です。
取材に訪れた私たちを明るくもてなしてくださった気さくなお人柄に、
校長時代にも子どもたちに慕われる様子が目に浮かびました。
天津わかしお学校は、つい立ち止まりたくなるような美しい海の目の前にあります。
「全てを受け入れ、美しく輝き、たくさん命を育む海に見守られて、
天津わかしお学校をみんなで奏でていきたい」と語る山中佳子先生の温かさに触れ、
この自然と音楽にあふれた環境で、子どもたちがより健やかに成長していくのだろうと感じました。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、
心より厚く御礼申し上げます。

Staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 中澤美羽
写真: 川しま ゆうこ(特別企画／Interview)
写真提供: くるちの杜100年プロジェクトin読谷
DTP: 浅野真理子(マール)
印刷: 新日本印刷
製本: ヤマナカ製本

